

# ヴァーチャスパティ・ミシュラ の知覚と聖言

山 本 和 彦

## 1 問題の所在

インド思想において認識手段 (pramāṇa) は、学派によって認められている数が異なる。唯物論者であるローカーヤタ (Lokāyata, or チャールヴァーカ Cārvāka) 派は知覚 (pratyakṣa) のみの1種類、仏教と初期ヴァイシェシカ (Vaiśeṣika) 学派は知覚と推理 (anumāna) との2種類、ジャイナ教 (Jaina) も大別すれば知覚 (直接知) と間接知 (parokṣa) との2種類<sup>(1)</sup>、サーンキヤ (Sāṃkhya) 学派とヨーガ (Yoga) 学派は知覚 (dṛṣṭa, pratyakṣa), 推理, 聖言 (āptavacana, āgama) の3種類、ニヤーヤ (Nyāya) 学派と後期ヴァイシェシカ学派 (or ニヤーヤ・ヴァイシェシカ総合学派) は知覚, 推理, 類推 (upamāna), 聖言 (śabda) の4種類, プラバーカラ・ミーマーンサー (Prabhākara-Mīmāṃsā) 学派は知覚, 推理, 類推, 聖言, 義準量 (arthāpatti) の5種類, バーッタ・ミーマーンサー (Bhāṭṭa-Mīmāṃsā) 学派とアドヴァイタ・ヴェーダーンタ (Advaita-Vedānta) 学派は知覚, 推理, 類推, 聖言, 義準量, 非存在 (abhāva, or 非知覚 anupalabdhi) の6種類<sup>(2)</sup>の認識手段を認める。

一つであっても六つであってもすべての学派から認められている認識手段は知覚である。知覚は他の認識手段に対して優越性 (paratva, jyeṣṭhatva) を持っている。知覚の優越性は、インド思想一般において、ほぼ認められている。認識手段を知覚しか認めないチャールヴァーカ派にとっては、まったく異論がないであろう。仏教では知覚と推理との2種類の認識手段が認められているが、知覚によって認識された知識のみが正しい知識であると考えられている。推理

によって認識された知識は、直接に個物（特殊）を対象としていないので正しくないが、日常生活のなかでは有益な知識なので便宜上認められているだけである。<sup>(3)</sup>したがって、仏教も知覚の優越性には異論がないと考えてもよいと思われるが、ディグナーガの定義<sup>(4)</sup>によれば、知覚は個物を対象とし、推理は概念（普遍）を対象とする。認識手段によって対象が異なるという考えのもとでは、認識手段に優劣をつけることは不可能である。<sup>(5)</sup>サーンキヤ学派、<sup>(6)</sup>ヨーガ学派、<sup>(7)</sup>ニヤーヤ学派<sup>(8)</sup>においても知覚の優越性は認められている。ヴァイシェシカ学派は、アートマンの認識手段を知覚と考えている。<sup>(9)</sup>ジャイナ教は、知覚と間接知は同等である<sup>(10)</sup>と考える。しかし、ヴェーダの権威を絶対的に認めるヴェーダーンタ学派は、天啓聖典（śruti）の認識手段である聖言の優越性を主張する。<sup>(11)</sup>

本稿においては、バラモン思想のほとんどすべての学派の論書に注釈を著したヴァーチャスパティ・ミシュラ（Vācaspati Mīśra, 841/842 or 976/977）<sup>(12)</sup>の考える認識手段の優越性、特に知覚と聖言について考察する。

## 2 ヴァーチャスパティ・ミシュラの著作

ヴァーチャスパティ・ミシュラの著作とその順序を確認しておく。彼はインド哲学のほぼすべての学派に関連する文献に対して注釈を書いている。『バーマティー』<sup>(13)</sup>（Bhāmātī）での彼の記述では、最初の著作はマンダナ・ミシュラ（Maṇḍana Mīśra, c. 660-720）<sup>(14)</sup>の『ヴィッディ・ヴィヴェーカ』（Vidhiviveka）に対する注釈書『ニヤーヤ・カニカー』（Nyāyakaṇikā）である。これはバーッタ・ミーマーンサー（Bhāṭṭa-Mīmāṃsā）学派の立場で書かれた。二番目の著作は、マンダナ・ミシュラの『ブラフマ・シッディ』（Brahmasiddhi）に対する注釈書『ブラフマ・タットヴァ・サミークシャー』（Brahmatattvasamīkṣā）であるが、書名が知られているのみであり、現存しない。これはアドヴァイタ・ヴェーダーンタ（Advaita-Vedānta）学派の立場で書かれた。三番目は、バーッタ・ミーマーンサー学派の立場からの言語認識（śābdabodha）に関する著作『タットヴァ・ピンドウ』（Tattvabindu）である。四番目の著作は、ウディヨータカラ（Uddyotakara, c. 550-610）<sup>(15)</sup>の『ニヤーヤ・ヴァールティカ』

(Nyāyavārttika) に対する注釈書『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパルヤ・ティーカー』(Nyāyavārttikatātparyāṭikā) であり、ニヤーヤ (Nyāya) 学派の立場で書かれた。五番目の著作は、イーシュヴァラ・クリシュナ (Īśvara Kṛṣṇa, c. 350-450)<sup>(16)</sup> の『サーンキヤ・カーリカー』(Sāṃkhyakārikā) に対する注釈書『サーンキヤ・タットヴァ・カウムディー』(Sāṃkhyatattvakaumudī) であり、サーンキヤ (Sāṃkhya) 学派の立場で書かれた。六番目の著作は、ヴィヤーサ (Vyāsa, c. 450-500) の『ヨーガ・バーシャ』(Yogabhāṣya) に対する注釈書『タットヴァ・ヴァイシャーラディー』(Tattvavaiśārādī) であり、ヨーガ (Yoga) 学派の立場で書かれた。七番目の著作は、シャンカラ (Śaṅkara, c. 725)<sup>(17)</sup> の『ブラフマ・スートラ・シャーンカラ・バーシャ』(Brahmasūtrasāṅkarabhāṣya) に対する注釈書『バーマティー』(Bhāmātī) であり、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ (Advaita-Vedānta) 学派の立場で書かれた。さらに『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパルヤ・ティーカー』のサプリメント、もしくはインデックスのような『ニヤーヤ・スーチー・ニバンダ』(Nyāyasūcīnibandha) という著作があるが、これは『バーマティー』のなかでは挙げられていない。

### 3 知覚の優越性

知覚の優越性についての議論は、ニヤーヤ学派のパクシラスヴァーミン・ヴァーツヤーヤナ (Pakṣilasvāmin Vātsyāyana, c. 400-450) が、最初に行ったと思われる。ニヤーヤ学派の根本経典『ニヤーヤ・スートラ』(Nyāyasūtra) に対するヴァーツヤーヤナの注釈書『ニヤーヤ・バーシャ』(Nyāyabhāṣya) のなかでの対論者との議論の要点は次のようになる。

それぞれの認識手段 (たとえばニヤーヤ学派では四種類、仏教では二種類) は同じものを認識対象 (prameya) とするの (pramāṇa-saṃplava 認識手段の交差的運用)、それとも別のものを対象とするの (pramāṇa-vyavasthā 認識手段の個別的運用)、と対論者は問う。それに対してヴァーツヤーヤナは両方の場合があると答える。同じものを対象とする場合、たとえば、アートマン (ātman) が認識対象である場合、信頼できる人のことば (聖言) によって、「アートマンは

存在する」ということが認識される。欲求 (icchā), 嫌悪 (dveṣa), 努力 (prayatna), 楽 (sukha), 苦 (duḥkha), 知識 (jñāna) を享受する同一主体が存在するはずであるという理由によってアートマンの存在が推理される。ヨーガ行者 (yogin) の三昧 (samādhi) の境地においてアートマンは知覚される。さらに別の例として、「ここに火がある」という信頼できる人のことば (聖言) によって火を認識した後で、その火に近づいて煙を見ること (推理) によって再び火を認識し、さらに近づいて火を直接眼で見ること (知覚) によって火を認識することもできる。したがって、聖言、推理、知覚という異なる認識手段によって、同じものを認識対象とすることができる。

次に別のものを対象とする場合、たとえば「天界に生まれたい人は、アグニホートラ祭を行うべし」というヴェーダ聖典のことば (聖言) によって認識される知識を天界に無知な世間一般の人は、推理することも直接経験 (知覚) することもできない。雷鳴が聞かれているとき、雨が即座に推理される。そのとき聖言も知覚も存在しない。自分の手が知覚されているとき、聖言も推理も存在しない。<sup>(18)</sup>そしてヴァーツヤーヤナは、認識結果は知覚によるものが最も優れていると言う。以上の個別の例を彼は以下のように一般化する。聖言によって認識された知識 (認識結果) を推理し、さらに知覚することは知ろうとする意欲があれば可能である。しかし、知覚によって対象が認識されれば、知ろうとする意欲 (jijñāsā) がなくなってしまうのでさらに認識しようとすることはな<sup>(19)</sup>い。

以上が知覚の優越性についての発端の議論である。このヴァーツヤーヤナの考えについて、注釈者ウディヨータカラは『ニヤーヤ・ヴァールティカ』のなかで、知覚に優越性がある理由をふたつ挙げる。ひとつは、知覚はすべての認識手段の基礎となっているという点である。<sup>(20)</sup>知覚は対象を直接認識できるが、他の認識手段は間接的にしか認識できない。知覚によって認識された対象を他の認識手段は認識するのである。言い換えれば、知覚なしには他の認識手段の成立はない。もうひとつはヴァーツヤーヤナと同じく、知覚以外の認識手段で対象を認識してもさらに認識したいという意欲が残るが、知覚によって対象を知

れば、さらに知ろうという意欲<sup>(21)</sup>（ākāṅkṣa）がなくなってしまうという点であり、異なった認識手段によって同一対象を認識する火の認識の例を取り上げている<sup>(22)</sup>。

#### 4 知覚と聖言

ニヤーヤ学派の立場で書かれた『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパルヤ・ティーカー』<sup>(23)</sup>、サーンキヤ学派の立場で書かれた『サーンキヤ・タットヴァ・カウムディー』<sup>(24)</sup>のなかでも知覚の優越性が認められている。しかし、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派の立場で書かれた『パーマティー』においては聖言の優越性が認められている。知覚と聖言との関係が問題になるのは、ニヤーヤ学派では世俗的なものも含めた認識論のなかであるが、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派では非世俗的な解脱の手段である梵我一如の直接経験（anubhava）においてである。アドヴァイタ派によれば、解脱は梵我一如の直接経験によって達成される。『パーマティー』のなかでの議論によれば、知覚によって「私」（アートマン）が認識されてもブラフマン（brahman）との一致は経験されず、むしろ、悲しみや苦しみに満ちたものとして経験される。この知覚による認識結果は、天啓聖典の記述（tat tvam asi「汝はそれである」）、つまり梵我一如（brahmātmaikatva）と矛盾する。知覚による認識ではアートマンは悲しみや苦しみに満ちたものであり、聖言による認識ではアートマンはブラフマンと同一である。知覚と聖典（聖言）によって同一対象が認識され、その認識結果に矛盾がある場合、どちらが正しいのか、という問題に対して、対論者は次のように主張する。知覚（pratyakṣa）は最も優れた（jyeṣṭha）認識手段（pramāṇa）である。聖典（āmnāya）は知覚に基づいている。したがって、両者による認識結果に矛盾がある場合、聖典（āmnāya）の方が間違っている<sup>(25)</sup>。この考えは、先に見たニヤーヤ学派のヴァーツヤヤーナの議論に基づいている。これに対して、ヴァーチャスパティは次のように答える。聖典は天啓であり、誤りはない。知覚は世俗的（laukika）な認識手段であり、真理（tattva）を認識できない。さらに、或ものを知覚して、銀（rajata）と認識した後で、それが真珠貝（śukti）であるとわかった場合、銀という最初の認識は真珠貝という後の

認識によって否定される。したがって、先に生じたものよりも後に生じた認識の方が強い。<sup>(26)</sup> ヴァーチャスパティは、ここでは真理の認識手段 (tāttvika-pramāṇa) は聖典であり、知覚ではないと言う。<sup>(27)</sup> これは、もともとマンダナ・ミシュラが『ブラフマ・シッディ』のなかで行っていた議論である。<sup>(28)</sup> 『ブラフマ・シッディ』のなかでの対論者は、聖言に対する知覚の優越性を次のように言う。知覚と聖典 (āmnāya) が矛盾する場合、聖典の方が弱い。なぜなら聖典は知覚に依存しているからである。<sup>(29)</sup> したがって、聖言よりも知覚が優れていることになる。この対論者の考えは、先に見たニヤーヤ学派の「あらゆる認識手段は知覚に基づく」<sup>(30)</sup> という考えと共通である。これに対して、マンダナは聖言の優越性を主張する。知覚の後で聖言知は成立するが<sup>(31)</sup>、時間的に後のもの（聖言）が前のもの（知覚）より強い。たとば、最初の「象」(hastin) という誤知は、後に「森の木」(vanaspati) という正しい認識によって否定される。<sup>(32)</sup> 知覚は人間の認識であり誤知があるが、聖言は天啓であり誤りはない。これらマンダナの考えを先に見たようにヴァーチャスパティは『パーマティー』において踏襲している。

さらに『ブラフマ・シッディ』のなかには梵我一如の認識には聖言以外に知覚の必要性を主張する議論があり、『ヴィッディ・ヴィヴェカ』のなかでの議論と内容も文章も重なっている。<sup>(34)</sup> 知覚の優越性の文章をマンダナは、ヴァーツヤーナ (Vātsyāyana) やウディヨータカラ (Uddyotakara) から引用している。<sup>(35)</sup>

## 5 梵我一如の認識手段

これと関連した議論は、『パーマティー』のなかでも見られる。『パーマティー』においては、聖言によるブラフマンの直接認識 (sākātkāra) が否定され、知覚によるブラフマンの直接認識が主張されている。この考えは、シャンカラの思想に基づくヴィヴァラナ派の思想と異なる。ヴァーチャスパティは、梵我一如の直接認識は、聖言ではなく、知覚によると言う。<sup>(36)</sup>

ここで、ヴィヴァラナ派とパーマティ派の相違について少し述べておく。ア

ドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派のなかには大きなふたつの思想上の流れがある。ひとつは、シャンカラやスレーシュヴァラ (Sureśvara, c. 750)<sup>(37)</sup> の思想を中心とするヴィヴァラナ (Vivaraṇa) 派と呼ばれる流れであり、もうひとつはマンダナ・ミシュラやヴァーチャスパティ・ミシュラの思想を中心とするバーマティー (Bhāmātī) 派という流れである。この二派の考え方の最大の相違点は、解脱の達成は梵我一如の直接経験 (anubhava) によるのだが、その直接原因 (kāraṇa) は何かというところにある。梵我一如、つまり「汝はそれである」 (tat tvam asi) はウパニシャッド (upaniṣad) という天啓聖典 (śruti) によって認識することができる。ヴィヴァラナ派は聖典による認識を直接的 (aparokṣa), バーマティー派は間接的 (parokṣa) だと考える。ヴィヴァラナ派の立場は聖典認識直接論 (śabda-*aparokṣa*-prasthāna) と呼ばれ、バーマティー派の立場は聖典認識間接論 (śabda-*parokṣa*-prasthāna) と呼ばれる。<sup>(38)</sup> バーマティー派のヴァーチャスパティ・ミシュラは、梵我一如の認識に関して、内官 (antaḥkāraṇa), つまり意 (manas) が、梵我一如 (tat tvam asi) の直接体験 (anubhava) の直接原因 (kāraṇa) であると言っている。<sup>(39)</sup>

## 6 ま と め

ヴァーチャスパティは知覚と聖言とではどちらに優越性があると考えていたのであろうか。彼のほとんどの注釈書においては知覚の優越性が主張されているが、ヴェーダーンタ学派の注釈書である『バーマティー』においては聖言に優越性があると言われている。これは、『バーマティー』がシャンカラの『ブラフマスートラ・シャーンカラ・パーシャ』の注釈書であり、伝統の継承という意味でシャンカラの思想を否定しなかったからと思われる。梵我一如の認識は、聖言によるのだが、さらに知覚の補助が必要であるという議論は、『ニヤーヤ・カニカー』においても見られるが、さらに『バーマティー』において、その認識手段は聖言ではなく知覚であるとまでヴァーチャスパティは言っている。この梵我一如に関する認識論の問題は複雑であり、矛盾を含んでいるように見えるが、バーマティー派の解脱の階梯<sup>(40)</sup>を考慮すればこの矛盾は解ける。解

脱に至るには祭祀の実行 (nityakarmāṇuṣṭhāna) から始まる階梯を踏まねばならず、<sup>(41)</sup> その段階によって知覚と聖言の優越性は交代する。聖言によって、梵我一如を認識 (śravaṇa) しただけでは、解脱はまだ達成されない。その後で、その聖典の知識に矛盾のないことを吟味し (思惟 manana), その後、瞑想し (upāsana), その後、梵我一如の直接経験 (anubhava, sākṣātkāra) <sup>(42)</sup> がある。この直接経験は聖言 (śabda) ではなく、知覚 (pratyakṣa) によるのである。その後、無明 (avidyā) の滅 (uccheda) があり、その後、ブラフマンの本質 (brahmasvabhāva) <sup>(43)</sup> が顕現し (avabhāsa), 解脱 (mokṣa) に至るのである。したがって、ヴァーチャスパティは、サーンキヤ学派やニヤーヤ学派などのテキストにおいては、世俗的なレベルで知覚の優越性を支持し、非世俗的な梵我一如の認識の最初の段階では聖言の優越性を支持する。そして、直接経験の直接の認識手段は知覚であると言うのである。

アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派のテキストに注釈するには、天啓聖典 (ヴェーダ、ウパニシャッド) の絶対的な権威と無誤謬性、そしてその認識手段である聖言の優越性を否定することはできない。一方で、認識論上の知覚の優越性をヴァーチャスパティは主張している。ここにアドヴァイタ派の伝統を保持しながらも独自の思想を展開させていくヴァーチャスパティの姿勢を見ることができるのである。

## 注

- (1) ウマースヴァーティ (Umāsvāti, c. 400-500) は、超直観智 (avadhi), 他心智 (manah-paryāya), 完全智 (kevala) を知覚に、感官知 (mati) と聖典知 (śruta) を間接知に分類している。長崎1988, 3参照。
- (2) NKośa 553-556; 中村1996, 26-29など参照。
- (3) PV II-56ab: abhiprāyāviśaṃvādād api bhrānteh pramāṇatā | 「[推理は] 目的 (対象) と矛盾しないから、迷乱であっても認識手段である。」
- (4) PSV 239,20-21: svalakṣaṇaviśayaṃ hi pratyakṣaṃ sāmānyalakṣaṇaviśayaṃ anumānam iti pratipādayiṣyāmaḥ | 「知覚は個別相 (個物) を対象とし、推理は一般相 (概念) を対象とするということをわれわれは証明するであろう。」
- (5) NV 93,12-13: yatra punar vyavasthā tatra guṇapradhānatā na cintyata iti || 「さらに、個別的な (認識対象によって認識手段が異なる) 場合、属性 (認識結果) の



優越性は考えられない。』

- (6) STK 123,6-124,1: samprati pramāṇaviśeṣalakṣaṇāvasare pratyakṣasya sarvapramāṇeṣu jyeṣṭhatvāt, tadadhinatvāc cānumānādīnām, prativādinām avipratipatteś ca tad eva tāval lakṣayati… | 「いま、認識手段の特別な定義にふさわしいときに、知覚はすべての認識手段のなかで最も優れているから、かつ推理などもこれ（知覚）に基づくから、対論者たちも反対しないから、まさにこれ（知覚）を最初に定義する。」
- (7) YBh 38,5-7: na ca pratyakṣasya mātmyam pramāṇāntareṇābhībhyate | pramāṇāntaram ca pratyakṣabalenaiva vyavahāram labhate | 「しかし知覚の優位性は他の認識手段に圧倒されない。さらに他の認識手段は、知覚の力によってこそ働きを得る。」
- (8) NBh 92,9: sāceyam pramitiḥ pratyakṣaparā | 「それゆえ、認識結果は知覚が最も優れている。」
- (9) VS 3. 2. 13 (Upaskāra 本では 14): aham iti pratyagātmani bhāvāt paratrābhāvād arthāntarapratyakṣaḥ | 「『私』[という認識] は、内我に存在し、他所に存在しないから、[身体とは] 異なるもの（アートマン）の知覚である。」
- (10) PM 8,18-21: tena yad āhuḥ “sakalapramāṇajyeṣṭham pratyakṣam” iti tad apāstam | pratyakṣapūrvakatvād itarapramāṇānām tasya jyeṣṭheti cet, na, pratyakṣasyāpi pramāṇāntarapūrvakatvopalabdheḥ, … | 「それゆえ『知覚は、すべての認識手段のなかで最も優れている』と言われることは否定される。他の認識手段は、知覚に基づいている（＝先行している）から、それ（知覚）は最も優れている、ということはない。知覚でさえ他の認識手段に基づくことが認められるから。」
- (11) 前田 1980,95-103 参照。Cf. Potter 1981,97.
- (12) ヴァーチャスパティ・ミシュラの年代論については、金沢1987参照。
- (13) Bhā 1020,19-21: yan nyāyakaṇikātattvasamīkṣātattvabindubhiḥ | yan nyāyasām-khyayogānām vedāntānām nibandhanaiḥ || samacaiṣam mahatpuṇyam … | 「『ニヤーヤ・カニカー』、『タットヴァ・サミークシャー』、『タットヴァ・ビンドウ』によって、ニヤーヤ、サーンキヤ、ヨーガ、ヴェーダーンタの諸著作によって、私は大きな功德を積んだ。」
- (14) Potter 1981,346.
- (15) Potter 1977,9.
- (16) Potter 1987,15.
- (17) Potter 1981,18.
- (18) NBh 91,5-92,8.
- (19) NBh 92,9-93,1: sāceyam pramitiḥ pratyakṣaparā | jijnāsitam artham āptopadeśāt pratipadyamāno liṅgadarśanenāpi bubhutsate, liṅgadarśānānumitam ca pratyakṣato didṛkṣate, upalabdhe 'rthe jijnāsā nivartate | 「それゆえ、認識結果は知覚が最も優れている。知りたい対象を信頼できる人の教示（聖言）から理解している人は、証因の知覚（推理）によってもまた知りたいのである。さらに証因の知覚に

よって推理されたもの（対象）を知覚から見たいのである。〔知覚によって〕対象が理解されれば、知りたいという意欲はなくなる。〕

(20) NV 91,15: sarvapramāṇānām pratyakṣapūrvakatvād iti | 「すべての認識手段は、知覚に基づいているから。」

(21) ākāṅkṣa は、ここでは一般的な意味で使われている。ヴァーツヤナは jijñāsā（意欲）ということばを使ったが、ウディヨタカラは ākāṅkṣa（意欲）ということばに言い換えている。ākāṅkṣā のテクニカルな意味については以下の文章を参照。TS 53,10-11: ākāṅkṣādirahitaṃ vākyam apramāṇam | yathā gaur āsvaḥ puruṣo hastīti na pramāṇam ākāṅkṣāviraḥāt | 「ākāṅkṣā 等を欠如した文章は認識手段ではない。たとえば、『牛は、馬は、人は、象は』[という文章] は、認識手段ではない。ākāṅkṣā がいないから。」さらに Raja 1963, 157-164 参照。

(22) NV 92,11-93,12: seyaṃ pamitiḥ pratyakṣapareti | pratyakṣeṇādhigate 'rthe ākāṅkṣābhāvāt tatparā | yathāyaṃ laukiko 'mutrāgnir ity āptopadeśād agniṃ praty āhitapratyayas taṃ deśaṃ gacchati | pratyāsīdat pūrvadhūmaviśeṣaṇaṃ dhūmāṅgatvena vyavasthitaṃ hutabhujaṃ pratipadyate | āsannataras tv idānīm indriyārthasannikarṣād agnipratyayaṃ karoti tadā nirākāṅkṣo bhavatīty ataḥ pradhānaṃ pratyakṣam iti | 『それゆえ、認識結果は知覚が最も優れている』と〔ヴァーツヤナは言う〕。知覚によって対象が理解されれば、意欲がなくなるから、それ（知覚）は優れている。たとえば、ある一般人が『ここに火がある』と信頼できる人の教示（聖言）から火に対する観念が与えられ、それ（火）の場所に行く。〔被限定者である火に〕先行する限定者である煙に近づいて、能遍である煙によって確立された供物を食べるもの（火）を〔推理という認識手段によって〕認識する。さらに近づいたその瞬間に感官と対象との接触から、〔知覚という認識手段によって〕火を認識する。そのとき〔さらに認識しようという〕意欲はないから、知覚は最も優れている、と。〕

(23) NVT 93,22-23: tāvad ayaṃ pramātā sākāṅkṣo yāvad upadhānavyavahitaṃ svarūpam upalabhate | upadhānānapekṣas tu pratyakṣeṇāvyavahitaṃ sāksād vahnim viśayīkṛtya nirākāṅkṣo bhavati | 「ある認識者が意欲を持っている限り、〔所遍＝火に〕介在する間接的なもの（能遍＝煙）自体を理解する。しかし、間接的なものに依存しない（＝推理に依らない）ならば、知覚によって直ちに直接に火を認識して、意欲はなくなる。」

NVT 37,16-17: na hi kariṇi dṛṣṭe 'pi cītkāreṇa tam anumimate prekṣāvanta iti | 「象を鳴き声で知覚した観察者は、それ（象）を〔さらに〕推理しようとは思わない。」

(24) STK 123,6-124,1.

(25) Bhā 9,2-3: na ca - jyeṣṭhāpramāṇapratyakṣavirodhād āmnāyasyaiva tadapekṣyāprāmāṇyam upacariṭarthatvaṃ ceti-yuktam, ... |

(26) Bhā 8,11-11,2.

(27) Bhā 10,6-7: tattvikapramāṇabhāvasyānapekṣitatvaṃ | 「真理の認識手段（聖言）

のはたらきは、〔知覚に〕依存しない。」

(28) BSi 39,2-44,9.

(29) BSi 39,10: *pratyakṣādivirodhe āmnāyasya dairbalyaṃ sāpekṣatvāt*, … |

(30) NV 91,15: *sarvaprāmāṇānāṃ pratyakṣapūrvakatvād iti* |

(31) BSi 40,3-4: *āmnāya eva balavāṃs tadvirodhe*, “*paurvāparye pūrvadaurbalyaṃ prakṛtivat*”, “*pūrvābādhena notpatir uttarasya hi siddhyati*” *iti* |

(32) BSi 41,3-10: *yathā dūrastheṣu vanaspatiṣu hastipratipattibhyo vanaspatipratipatteḥ*, *apekṣitā hi hastipratipattayo vyaktavanaspatipratipattyā hetutvena*, *na tasyā indriyārthasaṃnikarṣamātrāṃ janma*, *āpāte 'bhāvāt*, *na ca deśaviśeṣāt*, *taddeśasthasyaivotpatteḥ*, *tasmāt purovartiṣu vanaspatiṣu praṇihitamanaśaḥ prācyaviparyāsānugatam atisaṃskārasacivendriyādisaṃyogakāritā seti mantavyam* |

(33) BSi 40,7-9: *sambhavād vicitravibhramahetutvāt pratyakṣādīnām*, *vigalitanikhiladoṣāśaṅkatvāc cāmnāyasya*, *puruṣāśrayānām hi doṣānām śabde puruṣābhāve 'sambhavāt* |

(34) VV 126,5-128,5: *spāṣṭāvabhāsaṃ jñānaṃ yadi*, *na tatra tasyopayogaḥ* | … [中略] … *h'ānādiyogyaṃ pratyakṣaṃ sannikarṣān nānumānāt | sannikarṣasādhanaṃ tarhi gamanādyapekṣatām na tu pramāsādhanaṃ*, *siddhatvāt pramāyāḥ* … |  
÷ BSi 33, 19-34, 4: *spāṣṭābhātvam*, *na tasyopayogaḥ*; … [中略] … *hānādiyogya-viṣayaṃ pratyakṣam*, *saṃnikṛṣṭārthatvāt*, *netaraṇīti cet*; *saṃnikarṣahetus tarhy apekṣyatām*; *na pramāṇam*, *siddhatvāt pramāyāḥ* | \*Text reads *bh-for h-*.

(35) NBh 92,9: *sāceyaṃ pramitiḥ pratyakṣaparā* | 「それゆえ、認識結果は知覚が最も優れている。」

NV 92,11: *seyaṃ pramitiḥ pratyakṣapareti | pratyakṣeṇādhigate 'rthe ākāṅkṣābhāvāt tatparā* | 「『それゆえ、認識結果は知覚が最も優れている』と〔ヴァーツヤーナは言う〕。知覚によって対象が理解されれば、意欲がなくなるから、それ（知覚）は優れている。」

VV 123,6-124,1: *pramiteḥ pratyakṣadarśinaḥ sarvārtheṣu nairākāṅkṣyaṃ netarasya* | 「認識結果が知覚によって知られている間、すべての対象において意欲はない。別の〔認識手段〕では〔意欲がなくなることは〕ない。」

BSi 33,19-20: *pramiteḥ pratyakṣaparativāt tatra ca nairākāṅkṣyāt tadarthiyata iti cet*, … | 「認識結果は、知覚が優れているから、ここ（知覚によって認識対象が成立した場合）では、意欲がなくなるから、それ（知覚）が求められる。」

(36) Bhā 55,9-56,1: *na caiśa sāṅskātkāro mīmāṃsāsahitasyāpi śabdasya pramāṇasya phalaṃ*, *api tu pratyakṣasya*, *tasyaiva tatphalatvaniyamāt | anyathā kuṭajabījād api vaṭāṅkurotpattiprasaṅgāt* | 「またこれ（「汝はそれである」＝梵我一如）の直接認識は、考察を伴うけれども、聖言の結果ではなく、知覚の結果である。X だけが、X の結果と必然関係を持つから。さもないければ、クタジャの種からでさえヴェタの芽が生じてしまうから。」

(37) Potter 1981,19.

③8 島1986, 遠藤2000, 2002など参照。

③9 Bhā 57,4: na cāyam anubhavo brahmasvabhāvo, yena na janyeta, api tv antaḥkaraṇasyaiva vṛttibhedo brahmaviśayaḥ | 「これ（「汝はそれである」＝梵我一如）の直接体験は、ブラフマンの本質を「まだ」持っていない。それ（直接体験）によっては「ブラフマンの本質はまだ」生じないであろう。むしろ、「直接体験とは」まさに意識の変容であり、ブラフマンを対象としている。」

Bhā 150,16-17: brahmasākṣātkāraś cāntaḥkaraṇavṛttibhedah ... | 「またブラフマンの直接認識は、意識の変容である」

④0 解脱の階梯については、島1986参照。

④1 Bhā 62,2-63,6.

④2 NK 192,30: śrutamayī, cintāmayī, sākṣātkāravatī, ceti |

④3 Bhā 89,13-14: śrūtītiḥāsapurāṇasmṛtayaḥ pramāṇam | anubhavo 'ntaḥkaraṇavṛttibhedo brahmasākṣātkāras tasyāvidyānivṛttidvāreṇa brahmasvarūpāvirbhāvaḥ pramāṇaphalam |

## 参考文献・略号

### 第一次資料

- TB Tattvabindu of Vācaspati Miśra: *Tattvabindu by Vācaspatimiśra with Tattvavibhāvanā by Ṛṣiputra Prameśvara*, ed. V. A. Ramaswami Sastri, New Delhi: Navrang, 1991 [Annamalai University Sanskrit Series No. 3].
- TV Tattvavaiśarādī of Vācaspati Miśra: *Vācaspatimiśraviracitaṭīkāsametaśrī-vyāsabhāṣyasametāni, Pātañjalayogasūtrāṇi*, Pune, 1984 [Ānandāśrama Saṃskṛtagranthāvaliḥ Granthāṅkaḥ 47].
- TS Tarkasaṃgraha of Annambhaṭṭa: *Tarkasaṃgraha of Annambhaṭṭa with the Author's Own Dipikā, and Govardhana's Nyāya-Bodhinī*, edited with Critical and Explanatory Notes by Yashwant Vasudev Athalye, Introduction and English Translation of the Text Mahadev Rajaram Bodas, Poona: BORI, 1897, Revised and Enlarged Second Edition-Fourth Impression, 1988.
- NK Nyāyakaṇikā of Vācaspati Miśra: *Vidhiviveka of Śrī Maṇḍana Miśra with the Commentary Nyāyakaṇikā of Vācaspati Miśra*, ed. M. L. Goswamin, Varanasi: Tara Printing Works, 1986.
- NKośa Nyāyakośa of M.Bh. Jhalakikar: *Nyāyakośa*, Poona: BORI, 1978.
- NBh Nyāyabhāṣya of Vātsyāyana: *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparyāṭīkā & Viśvanātha's Vṛtti*, ed. Taranatha Nyaya-Tarkatirtha and chapters I-ii-v by Amarendramohan Tarkatirtha with an introductory by Narendra Chandra Vedantatirtha, Calcutta, 1936-44 [Calcutta Sanskrit Series nos. 18 & 19].
- NV Nyāyavārttika of Uddyotakara. See NBh.
- NVT Nyāyavārttikatātparyāṭīkā of Vācaspati Miśra. See NBh.

- NVTP Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi of Udayana Ācārya: *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi of Udayanācārya*, ed. Anantalal Thakur, New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1996 [Nyāyacaturgranthikā Vol. IV].
- NS Nyāyasūtra of Akṣapāda Gautama. See NBh.
- NSN Nyāyasūcīnibandha of Vācaspati Miśra: *Nyāyadarśana, the Sūtras of Gotama and Bhāṣya of Vātsyāyana*, ed. Padmaprasāda Śāstrī and Harirāma Śukla, with The 'Prakāśikā' Hindi Commentary by Dhuṇḍhirāja Śāstrī, ed. Nārāyaṇa Miśra, Varanasi 3rd ed. 1979 [Kashi Sanskrit Series 43].
- PBh Praśastapādabhāṣya of Praśastapāda: *Nyāyakandalī being a commentary on Praśasta-pādabhāṣya, with three sub-commentaries*, ed. by J.S. Jetly and Vasant G. Parikh, Vadodara: Oriental Institute, 1991 [Gaekwad's Oriental Series 174].
- PM Pramāṇamīmāṃsā of Hemacandra: *Hemacandra's Pramāṇamīmāṃsā*, Text and Translation with Critical Notes by S. Mookerjee in coll. with N. Tatia, Varanasi: Tara Book Agency, 1970.
- PV Pramāṇavārttika of Dharmakīrti: *Pramāṇavārttika-kārikā*, edited by Yūsho Miyasaka. *Acta Indologica* 2, 1971/72.
- PSV Pramāṇasamuccayavṛtti of Dignāga: *Dignāga, On Perception*, Masaaki Hattori, Harvard Oriental Series 47, Cambridge, Mass. 1968.
- BSi Brahmasiddhi of Maṇḍana Miśra: *Brahmasiddhi by Acharya Maṇḍanamiśra with Commentary by Saṅkhaṇi*, ed. by S. Kuppaswami Sastri, Madras, 1937.
- BSiV Brahmasiddhivyākhyā of Śaṅkhaṇi. See BSi.
- BSBh Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya of Śaṅkara Ācārya: *Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya with the Commentaries Bhāmatī, Kalpataru and Parimala*, ed. by Pandita Anantakrishna Shastri and Vasudev Laxman Shastri Pansikar, Bombay, 1917. Repr. Varanasi: Krishnadas Academy, 2000 [Krishnadas Sanskrit Series 25].
- Bhā Bhāmatī of Vācaspati Miśra. See BSBh.
- YBh Yogabhāṣya of Vyāsa. See TV.
- VV Vidhiviveka of Maṇḍana Miśra. See NK.
- VS Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda: *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda*, ed. by Jambuvijayaji, Baroda: Oriental Institute, 1961 [GOS 136].
- STK Sāṃkhyatattvakaumudī of Vācaspati Miśra I: *Sāṃkhyatattvakaumudī by Śrī Vācaspati Miśra with a Commentary called Sāṃkhyatattvavibhāraka by Vamśīdhara Miśra*, ed. Rama Sastri Bhandari, Benares 1919-1921 [Chowkhamba Sanskrit Series, No.54].

第二次資料（和文）

- 遠藤康 1999 「聴聞・思惟・瞑想・認識と八支ヨーガ： *Bhāmātī* 2. 3. 39 について」『愛知文教大学論叢』2; pp. 85-97.
- 2000 「アートマン認識の手段としてのヨーガ —ナーラーヤナ・ティーラタの *Yogasūtra* 解釈(2)—」『加藤純章博士還暦記念論集 アビダルマ仏教とインド思想』東京：春秋社；pp. 419-422.
- 2002 「ヨーガ派の天啓聖典観」『東海佛教』47; pp. 1-15.
- 金倉圓照 1976 「哲人ヴァーチャスパティ・ミシラ」『インド哲学仏教学研究〔III〕インド哲学篇2』春秋社，東京；pp. 261-318.
- 金沢篤 1987 「ヴァーチャスパティの年代論」『東洋学報』; pp.1-24.
- 島岩 1983 「『パーマティー』 I, 1, 1-4 和訳(1)」『名古屋大学文学部研究論集』LXXXVII, 哲学29; pp. 59-78.
- 1986 「不二一元論学派における解脱への道」『宗教研究』60-2 (269); pp. 95-116.
- 長崎法潤 1988 『ジャイナ認識論の研究』平楽寺書店，京都
- 中村元 1996 「ニヤーヤとヴァイシェーシカの思想」『決定版中村元選集』第25巻，春秋社，東京
- 前田専学 1980 『ヴェーダーンタの哲学』サーラ叢書24，平楽寺書店，京都

第二次資料（欧文）

Chakraborty, Nirod Baran

- 1967 *The Advaita Concept of Falsity - A Critical Study*. Calcutta Sanskrit College Research Series No. LVII, Calcutta: Sanskrit College.

Chatterjee, Satischandra

- 1939 *The Nyāya Theory of Knowledge*. Calcutta: University of Calcutta.

Hasurakar, S. S.

- 1958 *Vācaspati Mīśra on Advaita Vedāntin*. Darbhanga: Mithila Institute.

Murty, K. Satchidananda

- 1959 *Revelation and Reason in Advaita Vedānta*. Andhra University and Columbia University Press.

Natarajan, Kanchana

- 1995 *The Vidhi Viveka of Maṇḍana Mīśra: Understanding Vedic Injunctions*. Delhi: Sri Satguru Publications.

Potter, Karl H. (ed.)

- 1977 *Encyclopedia of Indian Philosophies*, Vol. II 'Indian Metaphysics and Epistemology: The Tradition of Nyāya-Vaiśeṣika up to Gaṅgeśa', Delhi: Motilal Banarsidass.

- 1981 *Encyclopedia of Indian Philosophies*, Vol. III 'Advaita Vedānta up to Śaṅkara and His Pupils', Delhi: Motilal Banarsidass.

- Potter, Karl H., G. J. Larson and R. S. Bhattacharya (eds.)  
 1987 *Encyclopedia of Indian Philosophies*, Vol. IV 'Sāṃkhya: A Dualist Tradition in Indian Philosophy', Delhi: Motilal Banarsidass.
- Raja, K. Kunjunni  
 1963 *Indian Theories of Meaning*. Madras: The Adyar Library and Research Centre, repr. 1977.
- Roodurmun, P. S.  
 2002 *Bhāmatī and Vivaraṇa Schools of Advaita Vedānta: A Critical Approach*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Sastri, S. Kuppaswami  
 1937 "Introduction" of BSi. See BSi.
- Sastri, S. S. Suryanarayana and C. Kunhan Raja  
 1933 "Introduction" of *Bhāmatī of Vācaspati*. Madras: The Adyar Library and Research Centre.
- Thrasher, Allen W.  
 1993 *The Advaita Vedānta of Brahmasiddhi*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Vetter, Tilmann  
 1969 *Maṇḍanamiśra's Brahmasiddhiḥ*, Brahmakāṇḍaḥ, Übersetzung, Einleitung und Anmerkungen, Wien.